

此頃倫敦の青年間に流行するは蕃カラを装ふことにして顔面を穢く見せんが爲め日中帽も被らずに歩くことは兼てより爲せる處なるが今や自動車流行あるより恰も自動車乗の如き風を爲し衣服に塵を着けて長途の駛行より還へれる如く見せ襟飾を一寸曲げたるは意匠を示せる處にして疲れ足をひきずり鼻頭にシミを付けて置く如きは更に妙なりと云ふ之を我邦青年のコスメチツクと白粉とに比して其差果たして幾何 (欽)

美術品と工藝品とは一體に大層接近してゐるものだが、唯美術品はパン問題を頭の中に置かず製作了なものではないならぬといふ點に於て工藝品と違ふ。即ち今少し金をかければもつと立派に美術的にゆくが、金をかけないで之れて満足しやうといふ様な風で拵へられた製作品は、眞の美術品といふことが出来ぬ。言ひ換ふれば、美術品とは、生活とか報酬とか、經費とか云ふ事を、全く眼中に置かずに、最上の力



を盡して拵らへられたものであらねばならぬ。之に反して工藝品は製作すれば他に同一のものが幾らも出来る。それで、今日日本に於いて美術品は、昔に比して進歩した處が見えない。と云ふのは明治の美術家が昔の美術家と、其人物の精神が相違してゐるからであらうが、其

他にも原因がある。(中畧) 明治の美術家の作は展覽會に出すために作つたものであるから、自分が出品しても買人が無いとした場合には、其日の生活にも困るといふ考から、作るものも金を頭の中へ入れて作るといふ譯で、品物のうちに其趣きが自から現はれ人をして崇高の感を起さしめぬのである。美術家の製作品程其人の性格を現はすものはない高尙な考の人が作つたものは自ら高尙な趣きが溢れてゐる (高橋義雄氏、商業界)

甲州駒ヶ岳 中林僊筆